

# 「紫色の砂漠」はレトリックではなかった

中村泰

私は一九四五年八月十五日の敗戦から旬日をへた同月下旬、海軍通信科予備補習生の軍籍を解かれて、熊本から大阪へ復員してきたが、その時通過した深夜の広島駅の光景をうたったのが別掲の詩「紫色の砂漠」である。

この詩の初出は『働く人の詩』二号（昭和26年11月発行）であるが、その時の題名は「ヒロシマ」であり、サブタイトルが「紫色の砂漠について」であった。それを一九七二年（昭和47年）二月、『中村泰詩集』（蒼馬社）を刊行する時、考える所があつて「紫色の砂漠」と改題して収録した。

初出誌発表直後、同人達によつて合評会が開かれた筈であるが、その席でどんな批評や意見が出たかは忘れてしまった。しかしその後、公刊された文献に発表された批評として、私の記憶に残っているものに次の二つがある。

まず初出誌発表直後に、後年被爆詩人として著名になつた栗原貞子が『広島生活新聞』紙上でこの詩を取り上げてくれた。同紙はその後、私の手許から紛失してしまつたが、彼女の没後に刊行された『栗原貞子全詩篇』（二〇〇五・七、土曜美術社出版販売）

の巻末に収録された「年譜」の「一九五一年（昭和二十六年）三十八歳」の項に次のようにある。

『旬刊広島生活新聞』を夫と二人で発行、文芸欄に力を入れ、それを足場に活動する。

栗原さんが残した約三千点の資料が広島女学院大学（広島市東区）図書館「栗原貞子記念平和文庫」に保管されているようである。もしそこに『広島生活新聞』が保管されていたら、後日、それを閲覧させて頂こうと考えている。

もう一つは初出誌発表以後、二十年近くたつて、先年亡くなつた犬塚昭夫が彼の当時のテーマであつた「関西戦後詩研究」の一環として『働く人の詩』ノート（『前夜祭』五号、一九七〇・二）を書き、その中でこの詩を全文引用した上で次のように書いた（カッコ内は引用者注）。

第二次『働く人の詩』の推進者であつた彼（中村のこと）は、その詩も一つの可能性をもっていたが、その可能性は、今どうなつてゐるだろうか。……中村泰は『ヒロシマ』の他に（何篇かの作品を）第二次『働く人の詩』に発表している。しかし彼の詩は『ヒロシマ』から出発できずにいる。むしろ技術ではなく、方法において思想において後退すらしている。

なかなか手きびしい批評である。しかし彼の批評は、私が聞きなかつた作品自体に即しての具体的な批評ではなく、方法、思想

といった漠然とした視点から書いている（そういえば栗原さんの一文も批評というよりも好意的な紹介文であったような気がする）。

この詩の作者である私は発表当時から、この詩には大きな弱点があると考えていた。それは題材である広島原爆投下の結果を「紫色の砂漠とでもいべき／神秘的な夜景であった」と捉えている点にあった。

その光景を目撃した時、私にはそれが原爆投下の結果であるという認識はなかったし、それを「紫色の砂漠」というイメージで受け止めたことに嘘はなかった。

しかし、非人間性の極限ともいべき原爆投下の実情が次第に明らかになって行くにつれて、私のイメージというか、レトリックはあまりにも弱く、貧しいという認識が私の内部で強くなっていった。

例えばこういうことがあった。筑摩書房刊のアンソロジー『祖国の砂』（一九五二・八発行）に私の詩が収録された時、その余波でもあろうか、旧河出書房からこんど野間宏編の『市民詩集』を出す企画があるので作品を送ってほしいという依頼があった。私はこの詩を送ろうと思ったが、前述の弱点を考え、別の作品にしたことがあった。

ところがそれから六十余年たった現在、私が弱点だと思ったイメージが、決してそうではなかったことがわかった。それを教えてくれたのは『朝日新聞』（大阪本社版）が今から三年前の二〇〇八年八月十五日夕刊に掲載した「終戦記念日に思う」という特集記事であった。その中の執筆者の一人、早坂暁氏（作家・脚本家）は当時、海軍兵学校予科生徒であったが、敗戦で故郷に帰る途中、広島駅頭で見た光景を次のように書いている。

列車で故郷の北条（現松山市）へ戻る途中、広島駅頭に立った。22日の雨の降る夜だった。

暗闇の中に、見渡すかぎり青い光が浮かび、異様に美しくった。被爆者の遺体から出たリンが燃えていたのだ。教官から、広島はたった一発の爆弾で消滅したと聞かされていたのは本当だった。ひざが、がくがく震えた。16歳の軍国少年は、この時、根底から変わった。戦争を国の生きる手段として使ってはならない。これがぼくの戦後の第一歩だった。

そうか。そうだったのか。あの夜、私を取り巻いていたあの異様な雰囲気は、原爆で亡くなった何万、いや何十万の被爆者の遺体から出たリンが青白く燃えていたのであった。私は慄然としながら、「紫色の砂漠」は決してレトリックではなかったと、心の中で叫び続けていたのであった。

（二〇二一・一九）

〈追記〉本文で書いたように、私は戦後早々に書いた「ヒロシマ」

（後に「紫色の砂漠」と改題）という詩に対する栗原貞子さんの短評を探していた。そのことを最近交流の出来た宇野田尚哉氏（彼は関西における戦後民衆文化運動を研究している）に話したことがあった。彼はそれを覚えていてくれたとみえて、広島で発見したその短評の写しを、今年早々私の許に送ってくれた。感謝の意をこめて、それを引用させてもらう。

『広島生活新聞』昭和27年1月10日付第11号「文芸短信」欄

「働く人の詩」2

「新大阪」の働く人の詩欄に登場した職場の詩人達が独立の詩誌を持つまでに成長したもので、なかむらやすしの「ヒロシマ」は夜汽車で通った原爆当時の広島街のむなしさをうたつて光つている。

発行所 大阪市都島区都島中通り六ノ三三 働く人の詩社

(二〇二一・一・五)

## 紫色の砂漠

一九四五年八月某日。熊本から復員した私は、夜、下関で山陽本線に乗換え、貨物列車につめ込まれて、一路大阪に向っていた。

がくつ、と

汽車が止った。

はっと目覚めると

車内は、やはり真っ暗だった。

ひろしまあー

ひろしまあー

遠くで駅員の呼声が

ふるえるように聞えた。

何時頃だったか、わからない。

人々は救われたように

外へ出て

水をくんだり

用を足したりした。

動く気力もなくなっていた私は坐ったままで

あけはなたれた扉口から

外を覗いてみた。

列車が長いためか

私達の乗っている車は

ホームにはいつていなかった。

見渡せば

深夜のヒロシマは

灯一つ見えず

ただ荒漠とした砂原が

紫の霞の立ちこめる中に

静かに起伏しているだけであった。

ここで一体

何が行なわれたというのだろう。

人家も

私達以外の人影もなく

まるで、それは

紫色の砂漠でもいうべき

神秘的な夜景であった。

それから、どれほどの時間が流れたか。

私のそんな思いにかわりなく

とつぜん汽車は大きく身震いすると

暗黒の中に

突き進んで行った。

### 【解題】

宇野田 尚哉

ここに掲載したのは、中村泰さんのエッセイ「紫色の砂漠」はレトリックではなかった」と、その前提となっている中村さんの詩作品「紫色の砂漠」である。原稿をお預かりしてから一年近くもお待たせすることになってしまい、中村さんには申し訳なかったが、内容からすると最もふさわしいメディアに発表することができたと考えている。

詩作品「紫色の砂漠」をめぐる諸々の経緯については、中村さんのエッセイの主題であるので、ここであらためて触れることはしない。そのかわり、サークル詩人としての中村さんについて若干の説明を補って、読者の参考に供したいと思う。

中村さんは、一九二七年に三重県で生まれ、一九三八年に大阪に移り、海軍通信科予備補習生として熊本で敗戦を迎えた。熊本から大阪に復員する途中の広島駅での体験が詩作品「紫色の砂漠」の背景となっていることは、中村さんのエッセイで述べられている通りである。

戦後西大阪の工場地帯で工場労働者となった中村さんは、労働組合の機関誌上で詩作を始め、その後も『夕刊新大阪』の「働く人の詩」欄に投稿するなどして詩作を続けた。病気療養を機に工場労働をやめて事務職に転じた中村さんは、一九五一年に個人誌『らんぶ』を創刊する一方、『夕刊新大阪』「働く人の詩」欄を基盤とする第二次『働く人の詩』創

刊の中心となった。「紫色の砂漠」の初出（原題「ヒロシマ」）は同誌の二号にほかならない。そして同誌の流れは、大阪でサークル連絡誌的役割を果たすことになる『律動』へと引き継がれていくことになる。その後詩誌『NON』を創刊した中村さんは、一九五五年に詩作の筆を断ち、以後は個人誌『蒼馬』『蒼馬社通信』誌上で小説や評論を書き継いでいくことになる。なお、「紫色の砂漠」を含む中村さんの詩作は、のちに『中村泰詩集』（蒼馬社、一九七二年）にまとめられている。

以上の通り、中村さんは、一九五〇年代前半の大阪の詩運動において、重要な役割を果たした。大阪の詩運動というと小野十三郎や浜田知章の名前が思い浮かぶが、無名のサークル詩人たちの交流の場が当時維持されえたのは、中村さんのような「詩活動家」たちの地道な努力があったからだと言つてよい。

中村さんは、一九五三年一月に、詩運動社の呼びかけにより開催された全国詩活動家会議に大阪を代表して参加している。全国から結集した「詩活動家」たちの固有名を詠み込みたいかたちでこの会議を歌った中村さんの詩作品「日本の動脈」（『詩運動』第七号）は、五〇年代の詩運動の雰囲気うかがううえで重要な作品であるが、後年中村さんはこの作品に注記して次のように述べている。「『詩運動』の評価について、私はその政治的セクト主義や俗流大衆路線など批判すべき点多いが、その反面、労働者の詩運動発展のために果した一定の役割を否定することは出来ない」と、現在でも考えている（『中村泰詩集』）。一九七二年の時点での中村さんのこのような回顧は、近年盛んになっている五〇年代文化運動の研究にとつても、参考になるものであろう。

以上、拙文が中村さんのエッセイと詩作品を理解するうえでの一助となつたら幸いである。